



貴き者の責務

日本住宅公団初代総裁 加納久朗 第八回

作家 高崎哲郎

De Profundis(深渊より)①、ニューヨーク、父久宜の死、そしてロンドン

横浜正金銀行のエリート行員加納久朗は、大阪支店勤務の後、大正4年(1915)に満州・大連支店に着任した。第一次世界大戦の最中であり、妻多津(多津子とも)と幼子同伴であった。同支店には6年まで2年余りの間勤務し、次いで太平洋を渡ってニューヨーク支店勤務となった。31歳。ニューヨーク支店勤務は4年間であったが、この時期に金融マンとしてニューヨークに勤務した意味は極めて大きい。国際的な通貨制度と指導勢力の関係にかつてない変化が生じた時期だからである。

大正初期の国際収支の行き詰まりを救ったのが、大正3年(1914)6月ヨーロッパで勃発した第一次世界大戦である。日本も同年8月、連合国側に参加した。大正4年から講和条約を締結した8年までの5年間の外国貿易の出超合計12億円と、海運収入を始めとする貿易外受取超過合計18億円との国際収支受取超過合計額は、30億円の巨額に達した。この結果、大正3年日本政府と日本銀行合計3億4000万円であった正貨は、17億円を激増し、同8年末には20億円(うち内地7億円、在外13億円)となった。

咳に接したるが其口を衝いて出る言々句々一として産業上の実利実益ならざるはなく其の貴族ぶらざる態度と真摯なる雄弁とは聞く者をして身の車中にあるを忘れしむるものありき、斯く迄に要領を得たる人の如何なれば満面の痘痕に鼻目の輪郭の不得要領なるやらんと怪しまる。(白駒)

久宜は晩年に至るまで「貴族ぶらざる態度と真摯なる雄弁とは聞く者をして身の車中にあるを忘れしむる」のである。

父久宜の一回忌にあたる大正9年(1920)の7月に、子爵加納久朗は父を追悼してパンフレット『どこ迄変って行くでせう ニューヨーク郊外イングルウッドにて』を刊行した。彼は生涯多くの政治的・経済的・社会的パンフレットを刊行したが、これが初めての冊子である。刊行の目的を彼は「はしがき」で書いている。現代語表記に改めた(以下同じ)。

「私は郷里の人々が数年郷里の町長をつとめた父(久宜)の為に記念碑を建てて下さったと云うことを此地で聞きました時に御礼の印として一小冊子を書いて捧げたいと存じました。処がゴタゴタ忙しく日を送って未だ書き始めませぬ内に父が此世を去りました。私が海外に勤めて居りまする為に最後の大事に何にも世話が出来なかった、そして日本に在る親類の人々、お友達の方々に大変心配をかけ其上に一切の御世話になりました。そこで御礼をなすべき借りがまた一つ増えました。其御礼として矢張り自分の考えを自分で書いて此世に捧げると云うことが一番よき方

外債残高は大正3年末の19億円が償還により大正8年末には16億円に減じたので、日本は戦前の債務国から一躍差引3億円の債権国となったのである。

アメリカ・ドルが国際準備通貨たる資質を充実したことにより、ロンドンに代わってニューヨークの国際金融市場としての中心的地位が確立しつつあった。だがポンド為替の決済機構・大陸とアメリカとの中継機能・ニューヨークとの時差による有利性などに基づくロンドン市場の伝統的役割は失われておらず、その限りにおいてイギリスの金本位復活は時間の問題と待望されていた。第一次世界大戦後、東京の景気変動に基づく銀需要の乱高下により、銀価の大変動と銀為替の大投機時代を現出した。大正8年末の横浜正金銀行本店・支店・出張所の数は36店、海外為替取引銀行は187行に上り、行員数は日本人719人、外国人348人で合計1067人の多数に達した。日本の銀行中で最多である。

ニューヨーク時代に父久宜を失った。大正8年(1919)2月26日、久宜は療養先の別府で死去した。享年71歳。久宜は慶応3年(1867)19歳で最後の上総一宮藩主と

法であり、且父に対してはよき手向けであると考えました」

〈目次〉を見てみる。第1節はしがき、第2節不安の今日、第3節生命と健康、第4節教育、第5節家庭、第6節政治と経済、第7節国家の施設、第8節宗教と国家、第9節改造に対する反対論と障害、第10節国際関係、第11節むすび。

全般的に社会の差別構造の改革を主張しており、第3節で「産児制限」を強く訴えていることが後年の主張と相俟って注目される。父久宜の追悼を込めた冊子であり、父の実現できなかった理想や理念を訴えているものと思われる。

加納は多津夫人をはじめ小学生の長男久道、同次男久次(後年中村家の養子となる)、幼稚園児長女多恵子と共に、一時期ニューヨークの高層マンションで暮らした。高層マンションでの生活により都会での高層住宅の必要性を痛感したのであった。(日本住宅公団総裁加納は「高層住宅建築論者」であった)。ここで多津夫人の進歩的で行動的な才女ぶ



加納家の家族(ニューヨーク時代、中央久宜夫人、左多津夫人、左下2女英子、後ろ左長男久道、右2男久次、右長女多恵子、右下人物不詳)

なり明治維新を迎えてから45年を経て、明治45年(1912)64歳の久宜は農林大臣就任の要請に見向きもせず、町長として最晩年の5年間を郷里一宮町で過ごした。晩年の口癖は「鹿児島のことでは何かの話があったら冥土に電話せい」、遺言は「一にも公益事業、二にも公益事業、ただ公益事業に尽せ」であった。(『加納久宜集』(松尾れい子編)。父久宜の他界により次男久朗が爵位(子爵)を継いだ。施主久朗は葬儀の喪主をつとめるべきであったが、公務を優先し帰国しなかった。晩年の久宜の風貌を風刺雑誌『東京パック』(明治45年(1912)1月号)は伝えている。

「名士パック画伝(其二)、子爵加納久宜先生予の先生の名を耳にしたるは鹿児島に良二千石として嘖嘖の好評ありたる頃に始まり爾来漸く耳に熟し、明治の二宮尊徳の称敢て当らざるにあらざるを知るに至れり、偶々一ノ宮より帰京の列車に同乗し始めて先生の警



晩年の久宜
『東京パック』風刺画、一宮町教委蔵

りを紹介する。彼女の孫にあたる伊藤恵子様の英文論文を参考にし、一部和訳して引用する。(引用をお許し下さった伊藤様に感謝したい)。「多津は18歳で久朗と結婚したが、夫久朗は大名の家系の後継ぎであり、若い主婦にとつて、古い格式をもつ家で家計を切り盛りし、また舅と姑それに4人の若い未婚の義理の妹(久朗の妹たち)を世話するのは楽ではなかった。大正3年(1915)に久朗が満州大連の支店勤務となって転勤した際には、格式のある家庭のしがらみから解放されてほっとした気分になった」

「多津は松本藩士の末裔だが、まれにみる進歩的な考えの女性だった。彼女は自分の判断で日本キリスト教婦人矯風会(キリスト教徒の立場から悪い社会風俗の改良を目指した婦人の会)に入会し、公娼制度の廃止運動に参加した。同時に男女同権の立場から婦人参政権の運動にも加わった。久朗がニューヨーク支店に着任した大正6年(1918)頃に自動車の運転を学び、そのテクニクは夫の上を行った。英会話の学習に励み、10歳代から英語を学んできた夫以上の会話が出来たという。久朗の息子の思い出では、この面では久朗は多津に劣等感を抱く時もあったが、久朗は彼女の能力を評価していたとも言える」

「久朗も確固たる男女平等論者であり、イギリスではフェビアン協会(議会制をとる穏健な社会主義協会)のメンバーとして活動したし、家族計画(産児制限)論者であり、『タイムマシン』・『透明人間』などのSF作品で知られる科学小説家H・G・ウェルズ(1866・1946、進歩的文明批評家であ

もある）の愛読者であった。これらの久朗の思想は多津夫人に影響されたのかもしれない。夫妻とも当時には珍しい進歩的思想の持ち主であり、その思想に基づいて実践もしている。彼女は流暢な英語を駆使してロンドン・ケンジントンの自宅で多くの著名人を接待した。その美貌もあつて社交界の花であった。『日本とイギリスのかけ橋』の役割を果たしたのであった」

◇

ニューヨーク時代に、加納のキリスト教信仰の影響を受けて後に横浜正金銀行の職を捨てて無教会主義キリスト教の伝道師になったエリート行員（後輩）がいた。鶴田雅二である。『キリスト教人名事典』によると、鶴田（1889・1975）は長崎市生まれで、第一高等学校（旧制）時代に校長新渡戸稲造の影響を受けキリスト教に関心をもつようになる。大正4年（1915）東京帝国大学法学部政治学科を卒業し、横浜正金銀行に入る。ニューヨーク支店時代、銀行の先輩加納久朗の紹介で『聖書之研究』（内村鑑三主宰）を購読する。昭和6年（1931）42歳で5人の子女を抱えながら銀行の要職を捨て伝道に志す。34年塚本虎一・松村成浩と『基督教愛国』を刊行した。37年1月塚本と『新約知識』を刊行する（44年3月まで）。46年個人雑誌『天の声』刊行（42号終刊）。50年5月『聖書第一年』刊行（255終刊）。著作『罪人と語る』（1926）、『南十字』（1928）その他多数。鶴田の久朗に対する敬愛の念は深く、久朗の葬儀の際に進んで司祭をつとめるのである。

◇

に適地の丘陵が見つかった。レッチワースである。同市の計画人口は3万3000人に想定され、設計は建築家バリー・パーカーと同レイモンド・アンウィンに託された。全体像は、小高い丘の上にほぼ南北の中心軸をもち、北端には鉄道駅が置かれ、バロック風の道路や公園が放射状に伸びている。住宅街と工場用地は遠くかけ離れ、その他は畑や牧場などの広い緑地帯である。計画は大好評をもって迎えられた。

「日本住宅公団初代総裁加納久朗は戦前に横浜正金銀行ロンドン支店長も務めた根っからのイギリス紳士だったというから、ロンドン赴任当時ハワードの図書を読み、レッチワースを訪問している可能性はある。加納が滞在していたイギリスでは、第一次世界大戦前からE・ハワードによって提唱された田園都市運動が軌道に乗り、いくつかの田園都市が建設の途上にあつた。その思想と運動は、ヨーロッパは言うに及ばずアメリカにも広がっていた。もちろん日本にも、田園都市運動や田園都市風の住宅デザインの影響は届いており、大正9年から始まった公営住宅地の建設や同潤会^{*}木造住宅の建設、そして田園調布をはじめとする民間郊外住宅地建設などに大きな影響を及ぼしていた」（『奇跡の団地阿佐ヶ谷住宅』）。

◇

◇

久朗は余暇を活用してイギリス国内の旅を存分に楽しみ、日本からの遠来の客をロンドン南郊外のストラットム（Stratham）の私邸に歓迎しもてなした。

◇



最初のロンドン時代、
一宮町教委「加納家史料」

◇

大正9年ニューヨーク支店を去つてロンドン支店勤務となる。支店長は大久保利賢（大久保利通8男、後に横浜正金銀行頭取）だった。横浜正金銀行は、第一次世界大戦での英国開戦の直前から為替基準を対英から対米に移していた。ロndonは国際金融市場の条件である安定通貨、自由為替市場、完全な銀行組織、手形割引市場などの諸条件を完備しており、開戦前の日本の米国向け生糸輸出ビル（為替手形）の8割までがロンドン向為替取り組みになっていたように、日本のみならず世界中の為替資金は同地に集中していた。このため正金銀行の為替資金はすべてロンドンに集中していたのである。

大正期の同正金銀行は、日本銀行や大蔵省と連携の上、輸出増進のため巨額の外貨買持をしたが、巨額の外貨受取超と通貨膨張の抑制策として、様々な活動を展開した。第一は、正貨の対政府・日銀への売却である。第二は、連合国の軍需物資購入代支払のため英仏露の短期国債合計6億5900万円が政府（預金部及び臨時国庫証券特別会計を含む）及び民間引き受けにより発行されたが、民間引き受け分の英仏露国債シンジケート銀行団幹事と

『河合栄治郎 伝記と追想』（社会思想研究会編）の〈英国在留時代の河合栄治郎君の想出 加納久朗〉に厚遇ぶりを見る。

河合栄治郎（1891・1944）は、経済学者であり社会思想家であった。東京帝大卒後、農商務省勤務を経て、大正10年（1921）から昭和14年（1939）まで東大教授として社会政策を講じた。個人の人格形成を最高善とする理想主義の立場から英国労働党流の社会主義思想を体系化しマルクス主義を批判した。同じ立場から軍国主義を攻撃し、このため大学で休職処分にされた。青年教育にも尽力し、彼の編集した学生叢書^{（そうしょ）}は当時の青年たちに大きな影響を与えた。

「1922年（大正11年）頃河合さんは奥さんと一緒に英国に來られた。私は度々河合さんと話したり、相談したり、一緒に演説や講演を聞いたりした。（中略）英国の社会教育及び社会科学研究の実際を見たいという熱望であり、私が友人の各方面にあたつた結果、クエーカーの友人からバーミンガムのロントリー氏（チョコレート屋さん）のセツルメントに数カ月泊つてはどうだという話があり、最初は余り気乗りがしなかつたようだが、あとからは非常に喜んだ。そこで本を読み、時際を見、色々の人に接せられた。その間奥さんは私の5人の家族と共にロンドンの南ストラットムの家で起居された。河合さんが時々ロンドンに帰つた時は、私の家に泊まつた。夜は日本のこと、英国のこと、欧州のことを話した。（中略）。徳川末期から明治維新にかけての私の亡父の逸話や昔話を非常に面白がり、同じ話をもう一度してくれと言われた。其の話^{（その）}というのは、――『二百余年目に初

なり、利払と償還事務に當つた。第三は、本邦資産家のためニューヨーク市場で、英米仏公債の買入れ取扱をしたことである。第四は、中国借款である。第五は、銀行引受手形とスタンブ手形の実施である。（大正10年7月次女英子誕生、後の伊藤英吉夫人）。

◇

久朗がロンドン時代に大きな影響を受けた図書にエベネザー・ハワード（Ebenezar Howard, 1850・1928）の『明日の田園都市』（Garden Cities of Tomorrow）がある。同書は今日都市計画家必読の書とされる。いち早く産業革命を達成し「世界の工場」となったイギリスは、農民がロンドン、マンチェスター、バーミンガムなどの都会に大移動し労働者となった。低賃金で働く彼ら労働者階級は工場の近くなどにスラムを形成した。大繁栄の陰で、空気や河川の汚染・汚濁が進み犯罪も急増した。そこに、「文明の生んだ地獄」を打破する小冊子が刊行され大反響を呼んだ。『明日の田園都市』である。著者はエベネザー・ハワードで、彼の著書はその構想「田園都市」とともに世界の都市計画の聖典になった。

ハワードが構想した理想社会は、都市の否定ではなく、「都市」と「農村」の融合であつた。『明日の田園都市』の「副題」は「真の改革に至る平和な道」である。ハワードは自ら考案した「田園都市」の設計図を、空間的かつ財政的に描いて見せた。彼は「田園都市協会」を設立し実践活動に入つて田園都市の用地を採し始めた。ロンドンから鉄道で約45分の所

めて江戸城の矢倉太鼓が鳴つた。非常招集の合図である。大名が駆け付けた酒井雅樂守曰く「いよいよ天皇方と戦さをするることになった、諸君は二百年來徳川^{（とくがわ）}の恩を蒙つたからには、何とか決心せよ」と。ところが満堂寂として声がない。亡父は当時十七歳の若者で初めての登城だが、此の有様に憤慨し、早速家財一切を売つて藩士を率いて出発したが、伏見鳥羽の戦には間に合わず、命からがら家來一人と共に逃げ、とぼとぼと箱根山を越えて江戸に戻り、領土上総の国に帰り、いの一番に天子様に藩籍（通常は版籍）をお返しした。太政官第一号で藩籍奉還奇特に思召され候事という勅書を貰つた」などという昔話だ。此の話が始まるといくら私が話題を社会問題に変えようとしても聞かなかつた。

日本人で英国氣質をほんとうに了解する人は実に少ない。私は英国に前後十二年居たが日本で英国の社会哲学史を知り、英国および英国人を知る人で河合さんの上に出る人はないと思う。河合さんの書き残したものは、これから役立つと信じる」

大正13年、久朗はロンドン勤務を無事終えてインド・カルカッタ支店長（ボンベイ支店長兼務）となる。その後、本店勤務（中国担当）などを経て、昭和9年（1934）支店長の重責を担つて再度ロンドン勤務となる。日英関係は中国問題などをめぐる緊迫の度を増す。彼は国際関係の激浪の中に投げ込まれ、家庭にあつては愛妻を失うのである。

（参考文献・千葉県一宮町教育委員会蔵「加納家史料」、『加納久宜集』（松尾れい子編）、『横浜正金銀行全史』、『横浜正金銀行』（土方晋）、横浜市立図書館資料、『奇跡の団地 阿佐ヶ谷住宅』、伊藤恵子様（ロンドン在住）提供文献など）。

^{*}同潤会住宅：関東大震災後、被災者に寄せられた義援金1000万円（当時）をもとに財団法人同潤会が設立され、東京向島の中ノ郷に初の鉄筋アパートを建設した。以後、江戸川、青山、代官山など15カ所2492戸のほか木造分譲住宅など5341戸を建てた。構造は和洋折衷で、防火、水洗便所、戸締りのよさなど高い水準を持つものであつた。